

# のうしやだい

4

2011/9

■ 先進経営体等派遣実習の  
3年間の総括及び評価

■ 卒業生の就農状況

■ 42期生の卒論

■ 校内トピックス

ふじさん牧場見学  
風評被害に対抗して直売会 など

■ お知らせ

卒業生の震災被害の状況  
専修科(科目履修コース)の案内 など

# 先進経営体等派遣実習の 3年間の総括及び評価

## 1 実習の目的・趣旨

全国各地の先進的農家・農業法人等の下に、1年次の7月から10月までの4か月間住み込んで、生きた農業技術・農業経営を学び、農村社会を知るとともに先進的な農業者から価値観、経営感覚、リーダーシップ、地域づくりなどを学ぶことを目的としています。また、この実習は、途中どんなにつらくとも最後までやり通すことにより、忍耐力が養われるとともに、人間性を磨くチャンスであるという趣旨も含んでいます。

## 2 実習先の選定から実習報告書提出までの流れ

基本的に学生自らが将来自分がやりたい農業のモデルとなる実習先を選定します。この時期が派遣実習には最も重要な時期です。

4月に入学した学生が7月から実習に行くための準備期間は3か月。学生によってはどういふ農業をしたいのかイメージもできていない者もいます。できれば1か月前には実習先を決めて準備をしたいので、意外に時間はありません。

そこで、講義とは別に毎週1回程度、担任の教育指導専門職の下で少人数制のゼミを行い、自分のやりたい農業像、先進的な経営についての研究など、議論を戦わせながら、自分のイメージを作り上げていきます。早い学生は其中で自分の意中の農家を紹介してみんなに意見を聞いてみたりもします。

その際、派遣実習先選定の参考になるように、先輩の

体験発表会を開催するとともに、過去に派遣した実習生の情報、農業法人協会の受け入れ先リスト、OB名簿などを用意していますが、なかなかその中に納まるものはありません。先のリストを練りながらもホームページで全国の有名な農家や農業法人を探し回る学生が大半ですが、中には読んだ本にひらめきを感じ、著者に直談判して認めてもらった学生や、講義で来て頂いた方に直接頼んだ学生もいました。(なお、学校では、百聞は一見にしかずと、出来るだけ実習先を事前に訪問するように勧めています。その時には、ご主人だけでなくお世話になる家族、特に奥さん方ともよく話すようにというのが実は大事なポイントになります。)

このようにして、派遣実習先が決まると先方と連絡を取り合いながら実習計画を作成します。実習に入る直前の6月下旬、各学生は、自分がどこで何を学んでくるのかについてパワーポイントで紹介しながら、実習に向けた決意表明を校長以下教職員と全学生の前行います。

いよいよ実習です。学生も不安と期待を胸に抱いて全国に散ります。実習中は毎日の活動概要・感想を記録し、2週間ごとに定期報告書を作成して学校に提出します。学校からは、毎月2回、実習中の学生から届いた近況報告や教育指導専門職からのアドバイスなどを取りまとめた指導通信誌「桜通り通信」を学生に送付します。これが学校と学生、学生同士をつなぐ絆になります。

また、派遣実習中に1回、巡回指導として教育指導専門職や就農支援専門職が派遣先を訪問します。基本的には、受け入れ先の農家の方と学生を交えて、これまでの作業内容・生活状態・成果などを聞き取り、アドバイス

実践的農業者の養成を目指す本校では、付属施設としての固定した農場は設置せず、「農業者大学の農場は全国各地の先進農家にある」として学生を全国の先進経営体等に派遣し、実習を依頼しています。そのため、一人ひとりの学生が目指す目標に最適な実習先を選ぶことができるのが本校の特色です。

や必要に応じて実習計画の見直しを行います。ときには夕食に学生を呼び出して、苦労話や愚痴を肴に地元の名産品で一杯ということもあります。

実習中に何かあると、担任の教育指導専門職に電話がかかってきます。学生や派遣先から携帯に連絡が来ると、「すわ、トラブルか?」と、電話を受ける前に構えてしまします。

このほか、休日の過ごし方を聞いてみると、日頃の疲れを取るために寝ているという学生もいれば、せっかくの機会なので他の農家の見学や観光という学生まで様々です。たまには近くに派遣された学生同士で会って話したりということもあるようです。

実習が終わると、久しぶりに集まった学生が実習の土産話の花を咲かせてくれますが、派遣実習に行く前と後では学生がはつきり変わっています。実習を終えた学生を迎えるとき、みんながどれだけ成長したかを見るのも楽しみの一つです。

最後に学内で実習成果について報告会を行うとともに、「最終報告書を取りまとめて実習は終了します。」

3年間実施してきて、最初は実習候補のリストも不十分でなかなか実習先が決まらなかったり、実習先に行ってみると期待した内容と違って、人間関係や体力的な面での苦労などから派遣先を途中で変更したりと、色々ありましたが、リストの充実、下見の徹底、派遣前の近隣農家での実習やアルバイト紹介など、改善を加えていきました。それでも、もうすこし派遣先を決めるのに時間が欲しいとか、冬作物の実習をしたいとか、農業観や価値観の違いなどによるトラブルは実際に実習を始めてしばらく経つてから出てくることなどまだまだ改善しなければならぬことがあります。

緑肥(ヒマワリ)のすき込み作業のようす

### 3 実習の実績

地域別では毎年関東地区が多く、作目別では野菜栽培農家で実習を受ける学生が多くなっています。また、有機栽培も比較的人気が高くなっています。経営形態別にみると法人と個人の農家を選ぶ学生が半々で、いずれも生産だけを行うところを選ぶ学生が多くなっています。6次産業化が大切といわれておりますが、卒業後の自己経営を見据えた場合、加工や観光まで実施している受け入れ先を選ぶ学生はまだ多くないようです。その他詳細は下表のとおりです。

単位：人

年度	20	21	22	合計
<b>地域別</b>				
北海道	1	6	0	7
東北	7	6	1	14
関東	20	15	21	56
北陸	1	4	2	7
東海	3	4	2	9
近畿	2	1	2	5
中国	1	2	3	6
四国	1	0	3	4
九州	2	0	5	7
沖縄	0	0	1	1
<b>作目別</b>				
水稲	7	12	8	27
野菜	25	22	25	72
果樹	5	6	10	21
花き	2	5	1	8
畜産	6	6	3	15
工芸作物・その他	7	1	6	14
有機農業	17	8	11	36
観光農園	9	8	7	24
<b>経営形態別</b>				
法人(生産+加工+観光)	5	4	3	12
法人(生産+加工)	6	0	2	8
法人(生産)	9	13	15	37
法人計	20	17	20	57
個人(生産+加工+観光)	0	1	0	1
個人(生産+観光)	0	1	2	3
個人(生産+加工)	1	5	3	9
個人(生産)	15	9	11	35
個人計	16	16	16	48
研究所・その他	3	2	3	8

※注：1人の学生が複数の場所で実習を行った場合はそれぞれ1人としてカウントしているの  
 延べ人数です。  
 「観光」は観光農園、レストラン、民宿などが含まれています。  
 「生産」には宅配などの直売も含まれています。

### 4 受講した学生の声

非農家出身者からは、「実習前に漠然と思い描いていた農業への見方が変わった」、「農業が改めて面白いと思った」という意見が多く寄せられました。その一方で、「もっと技術に関する勉強をしなればならない」と思われられたり、「もっと作業速度を上げられるように鍛えないといけないと感じた」人も多かったようです。特に年次別に見ると、初年度の学生より3年目の学生は、農業を始める厳しさをより実感した人が多いようです。

農家出身者からは、「進んだ技術を学ぶことができた」、「最初は不安もあったが、良い経験になった」といった意見が多く寄せられました。その一方で、「実習を行う前に実習先で栽培している作物に関する情報をもっと良く調べておけば良かった」という反省の声もありました。



イチゴの管理作業中(42期生)

### 5 派遣先からの声

派遣実習が終了した時点で、毎年実習先で学生を指導していただいた農業者から所見をいただいています。これを改めて読み直してみると、実習面については「前向きで、農業経営について色々学びたい様子が見られ、よく手伝ってくれました」、「どんな作業にも積極的に取り組み、しっかりと将来のビジョンを持っており、目的意識を持って行動しているように見受けられました」、「どんな仕事でもいやな顔をせず、誠実に丁寧に取り組む姿勢は、他の人を感激させるほどでした」、「研修生としてだけでなく、経営的な目線でも物事を見ていたようで頼もしく思いました」、「積極的に参加する姿勢があり、自分の持つ考えもはっきり発言する。こちらの意見も聞くことができるなど、社会人として自立しているように感じられました」、「常に一歩前を見ながら毎日をごしているように感じました」、「定休日を利用して他の農園の見学も意欲的に行っていました」、「ひとつひとつの作業にも独自のスタイルを見出したり、アイデアも豊富で積極的に取り組んでいる姿勢が見て取れてとても良い実習態度でした」等々非常に高い評価を受けている学生が多いのに対して、「教えてくれるのを待っているような受け身の状態が気になりました」、「指示された事についてはそつなく無難にこなしてゆくが、自分から質問や仕事を探す様子が見られず残念でした」、「大きな問題はないが、生産などに対し、どんな学習意欲は感じられませんでした」などの評価を受けた学生が毎年2〜3名いました。一方、生活面については、学校では授業に遅刻しがちな学生も含めてほとんどの農業者から高い評価を受けていたのに驚かされました。親バカかもしれないが、日本農業の将来を担ってくれる農業者が育ちつつある感触を感じます。



受け入れ先の農家さんと(中央が41期生)



受け入れ先の農家さんと(中央が43期生)

# 卒業生の就農状況

平成21年度卒業生への聞き取り調査

## 〔概要〕

つくばでの新たな教育課程の最初の卒業生である11期生を対象に、職員が個別に訪問し、聞き取り調査を実施しました。

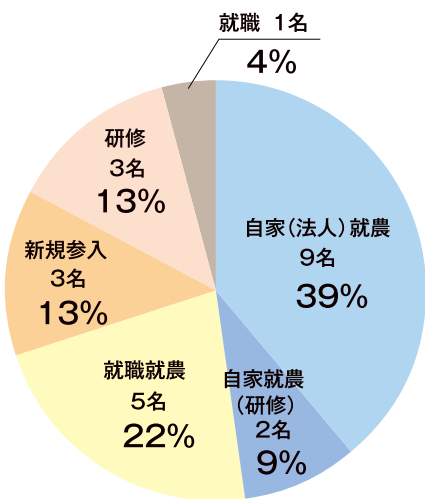
この調査の目的は、卒業後約1年を迎えようとする卒業生の実態を見、生の声を聞くことを通じ、今後の就農支援の充実強化や定着支援対策並びに教育計画の改善等の検討に資することです。

なお、調査対象は平成22年3月に卒業した23名のうち、海外研修者等を除く21名で、平成22年12月から平成23年2月にかけて実施しました。

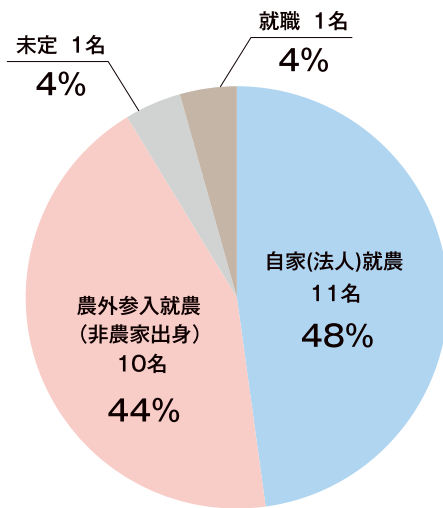
## 〔就農状況の変化〕

卒業（平成22年3月）時点では21名が就農し、1名が未定でしたが、平成23年2月時点では全員が進路が決まり22名が就農し、就農率は96%となりました。また、非農家出身の卒業生のうち3名（茨城県で露地野菜の経営、京都府で豆類を主とする経営、兵庫県で豆類を主とする経営）が既に自分の農地を確保し営農を開始していました。

【卒業後約10ヶ月時点での状況】



【卒業時点での進路】



## 〔在学中の教育に対する評価・意見〕

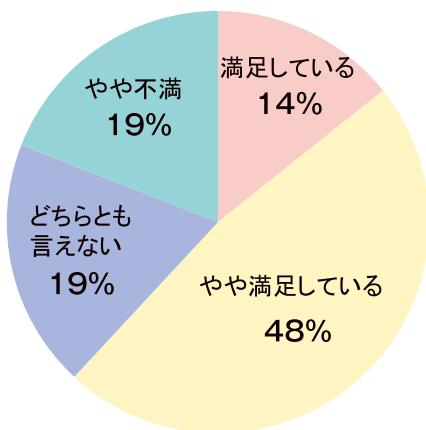
在学中には学期の終了ごとに授業の満足度評価を実施し、毎年度概ね80%以上の満足度でした。これらの学生が卒業し、実際に就農した後、学校での教育を振り返ってどう評価しているかについて、「大いに満足している」、「満足している」、「やや満足している」、「どちらとも言えない」、「やや不満である」、「不満である」、「大いに不満である」の7段階で評価してもらったところ、「大いに満足している」、「不満である」及び「大いに不満である」と答えた者はなく、左の円グラフに示すように全体の6割強が「やや満足」以上の評価をしています。

さらに、「学校の教育・就農支援で良かった、役に立ったと思う点」、「学校の教育・就農支援に欠けている、改善すべきと思う点」及び「学校に対する要望」の3点について卒業生の言葉で語ってもらいました。それらの聞き取り内容を学校側でいくつかの項目に整理し、それぞれの項目に該当する意見を述べた者の人数を示した結果が次ページの3つの表です。

「学校の教育・就農支援で良かった、役に立ったと思う点」については、先進経営体等派遣実習で人の繋がりや勉強ができたこと、研究チーム派遣実習で違う視点で見ることが勉強ができたこと等をあげる者が多く見られました。また、経営者の思想を学べたこと、学生間の交流や講師等との人脈形成なども多くの者が評価しています。

一方、「学校の教育・就農支援に欠けている、改善すべきと思う点」については、入学前の学歴・経歴が多様なことを反映し、より専門的な知識の習得を求めた者がいる一方、より実践的な内容とすべきとの意見も見られました。

【教育内容の満足度(7段階)】



【学校の教育・就農支援に  
欠けている、改善すべきと思う点】

項目	人数
専門的な知識の習得ができない	5
実践(実習)がない、実践する場所がない	5
より実践的な講義とする	3
教育指導専門職に専門家がいらない	3
経験者と未経験者は別授業とする	2
農業の基礎が学べない	2
その他	27

【学校の教育・就農支援で  
良かった、役に立ったと思う点】

項目	人数
先進経営体等派遣実習で人の繋がりや勉強ができた	8
研究チーム派遣実習で違う視点で見ることや勉強ができた	6
経営者の思想を学べた	5
寮生活で交流ができた	5
講師、研究者との人脈ができた	4
夜間でも学校で勉強ができた	3
一流の講師の話が聞けた	2
農業以外の知識の習得ができた	2
その他	10

【学校に対する要望】

項目	人数
卒業生との繋がりや情報発信を強化する	3
就農支援を強化する	3
農業実践者を積極的に講師に登用する	3
学生間の交流機会を増やす	2
学生の質の向上が必要である	2
農業者の失敗も含めて生の話を聞かせる	2
農業実践に必要な科目を強化する	2
就農目標を学生に早期に設定させる	2
41期生を講師に呼ぶ	2
その他	13

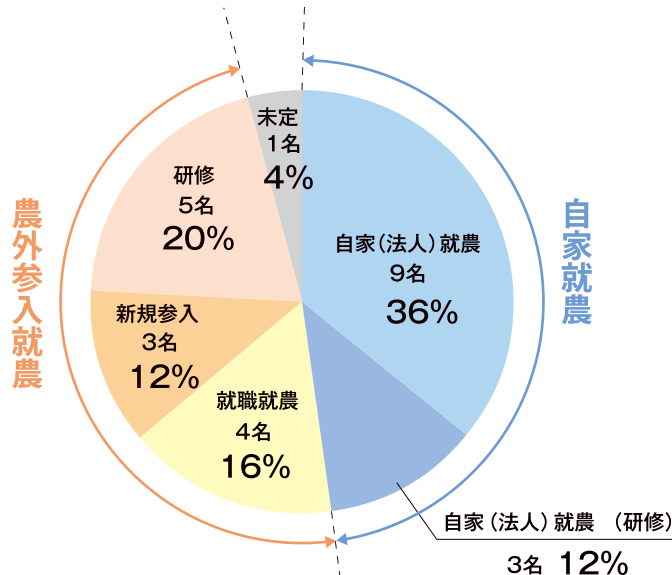
学校に対する要望としては、卒業生との繋がりや情報発信の強化、学生間の交流機会を増やす等について、複数の者から意見がありました。

また、農業実践者の話をより多くの学生に聞かせてほしいとの意見も多く、現役の学生に近い立場で話のできる自分たち41期生にも話をさせてほしいとの積極的な意見も聞かれました。

平成22年度卒業生の就農状況

平成23年3月に、つくばでの新たな教育課程における2期目の学生が卒業しました。農家出身の学生は直ちに自家で就農しますが、将来の経営に資するよう研修などの経験を積む学生もいます。また、約半数を占める非農家出身の学生も、3名が卒業時点で農地を確保し新規参入就農を行ったほか、農業生産法人への就職、就農希望地での農家研修など、それぞれの就農の道を歩み出しました。卒業時点での就農率は96%となりました。

【卒業時点での進路】





農業者大学の卒業論文では、学生はまずは自らの農業観や追求する農業の将来像を模索することから着手します。

例えば、追求する農業の将来像の設定においては、①「30年先にはこういう農業経営を實踐していきたい」という将来像のもとに、それに見合った規模や経営形態等を構想し、②「30年先に描いた将来像を實現可能にするためには」という前提の上で、そこから25年もしくは20年先の経営に視点を移して、その時点で経験していた方がよいことや、取得した方がよい資格、購入した方がよい設備や備品、農地、などそれぞれ広く構想していき、③さらに同様の手法で10年先、5年先と現在に近づけていく、という要領で進めていきます。

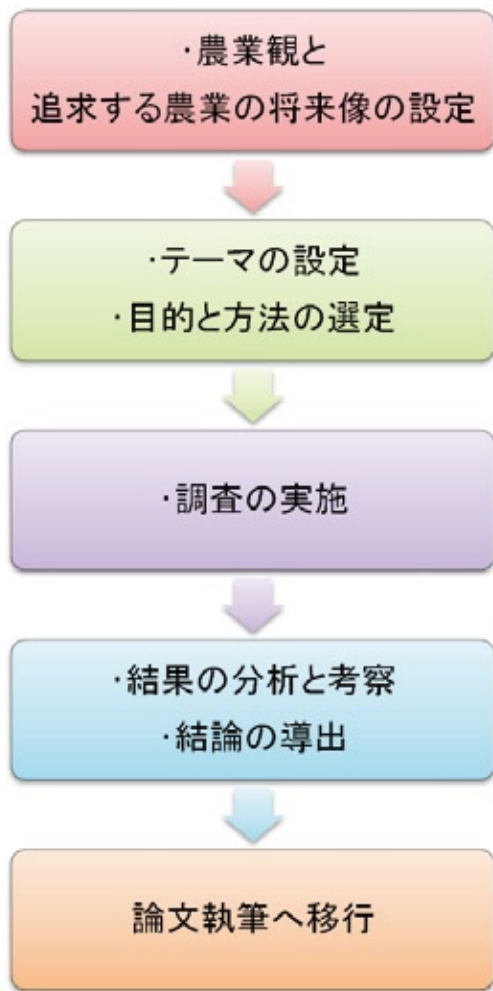
担任の教育指導専門職から学生への無数の問いかけを通じてながら独自の将来像を完成させるこの過程は、学生が自らの将来について真剣に考える貴重な機会でもあります。

追求する農業の将来像が完成したら、設定した現在から比較的近い未来の将来像を満たすために達成しておくべきこと（例えば認定就職

者や認定農業者の資格を取得することが求められる場合、そのために必要な営農計画を策定することなどに注目していき、教育指導専門職と相談の上、卒業論文として取り組む価値があるとすればそれをテーマとして設定し、その目的とそれを明らかにするための方法について考えていくこととなります。その後は、各自が方法に沿って調査を進めていき、その結果をもとに独自の分析を加えて考察を行い、結論を導いて執筆へと移行します。

ここで42期生の卒業論文に目を向ければ、取り上げたテーマも「実家の経営改善」から「直売所の経営」、「農業経営のリスク」などと大変幅広く、多岐にわたり農業者大学校にしかない力作が揃いました。

多様なテーマを切り口として、それぞれの学生にとって決して無駄にはならず、かつ将来振り返ったときに有意義な取り組みであったと回想してもらえよう、教育指導専門職は学生個人に正面から向き合って直接指導をしました。執筆指導の仕方は一様ではなく、教育指導専門職を中心として教職員は密に情報交換を



我々教育指導専門職もこれまでの経験を総動員して、誠心誠意彼らの指導にあたっていきたいと思っています。

農業者大学の最後の学生となる43期生の卒業論文指導が既に始まっています。

行い、各学生が置かれている状況によって指導内容を変えていく、まさしくオーダーメイドの長期にわたる教育指導が行われました。

42期生の卒業論文テーマの主な傾向

内容	件	%
経営計画のシミュレーション	9	38
実家の経営分析・経営改善	5	21
法人化・法人就職の得失	2	8
直売所経営の調査分析	2	8
経営リスク分析	1	4
パッケージデザイン	1	4
農業による福祉	1	4
その他	3	13
合計	24	100

# 校内トピックス

## 平成22年度卒業式〜地域へはばたけ〜

平成21年4月に入学した42期生24名に、平成20年4月に入学した41期生1名を加えた計25名の卒業式が3月4日に挙行されました。

卒業式では、校長式辞、農研機構堀江理事長の挨拶に続いて、農林水産省大臣官房藤本参事官をはじめ、つくば市など多くの来賓の方々から卒業生へ励ましの言葉を頂きました。

答辞では、卒業生代表の石川さんが、楽しかった学校生活の思い出やお世話になった方々への感謝、農業に取り組む決意を語ってくれました。

卒業生たちは、自家の農業を継ぐ者、農業法人で働く者、認定就農者として新規参入を目指す者など、目指す農業経営者への第一歩を踏み出しました。



卒業式の記念撮影に臨む42期生

## ふじさん牧場見学

5月31日、山梨県富士吉田市に出かけて、特別講義Ⅱの現地講義を実施しました。

現地では、羊の毛刈りや牛の搾乳等の体験牧場の経営を实践され、(株)農業技術通信社が主催するA-1グランプリも受賞されている、ふじさん牧場の藤田副場長から「ビジネスプランの作り方」について講義を受けました。ご自

分の経験を踏まえた講義は学生たちが自分の就農や経営を考える上でのお手本になったようです。

「自分から飛び込んで聞きに行きなさい」、「何をやりたのか目標を明確にしてストーリーを作りなさい」、「市場、競合、自社に分けて実現性の分析を行いなさい」などどれも大切なキーワードがちりばめられており、日頃からなかなか学生の心に届いていないと感じていた言葉がすんなりと入っていきううに見えました。写真をご覧いただくと、学生たちが身を乗り出して熱心に聞き入っている様子が伝わってくると思います。



ふじさん牧場の藤田副場長の講義を受ける学生のようす

## 風評被害に対抗して直売会

5月20日に和光市で東日本大震災支援コンサートがあり、一緒に原発事故の風評被害に苦しんでいる茨城県産農産物の直売会も行うこととなりました。農業者大学の卒業生が出品することとなり、その支援に行ってきました。

安全性をアピールするには放射線量検査を行うのが一番ということで、測定方法を茨城大学の高妻先生から指導を受けました。出品する野菜等は予め放射線量を測定して安全性を確認し、更に会場でも放射



直売を行う卒業生の様子(41・42期生)

線量を測定するデモンストラーションを行い販売しました。測定をしていると、消費者の方から測定方法や放射線量について沢山の質問を受け、関心の高さを実感しました。方が高い放射線量が検出されたら、と一抹の不安を隠して笑顔を振りまきながら、消費者の皆さんには安全性と品質の高さを理解して頂き、好評のうちに用意した野菜は完売しました。

## 作物栽培活動

作物栽培活動は、農業者大学から徒歩で十数分の場所にある農家のほ場を借りて、作物の播種から収穫までの作業を体験し、気象の変化が作物に与える影響や病害虫の発生を予察するなど就農へ向けての観察力・実践力を養う事を目的として実施しています。ほ場の区画には、学生が全員で共通の作物を栽培する必修区画と、希望する学生に思う存分栽培をしてもらう選択区画が準備されています。

この度ご紹介するのは必修区画で栽培したトウモロコシの収穫作業です。4月13日に種蒔きをしたトウモロコシは、約90日の生育期間を経て7月に収穫適期を迎えました。その間、出芽率調査、草取り、間引き、追肥、防除、防鳥などの作業を専門家の指導を受けながら行ってきました。このような作業を通じて、出芽率調査では物事を科学的に思考・行動できる能力を養い、草取りでは雑草防除の出来不出来がその後の作物の生育に与える影響の大きさも体験しました。

農家出身の学生と非農家出身の学生がほぼ同数という状況の中、作物の栽培経験が既に有る学生と、栽培経験がほとんど無い学生が、喧々諤々お互いに刺激を受け合いながらの栽培活動になったことと思います。



トウモロコシを収穫する学生のようす

# お知らせ

## ◆東日本大震災と農者大の状況

東日本大震災で被災された皆様にご心よりお見舞申し上げます。  
農業者大学のあるつくば市は震度6弱で、かなりの揺れを感じましたが、校舎の被害も軽微で、当日の夕方までに学生全員の無事を確認することができました。

## ◆東日本大震災被害者への授業料免除

本校では、経済的な理由や風水害等の災害を受けたことにより授業料の納付が困難な場合に授業料を免除する制度を設けています。  
今般の東日本大震災の甚大な被害に対応し、農業者所得を主たる収入としている学資負担者が、農業者産基盤への甚大な被害、農産物の出荷制限、東京電力福島第一原子力発電所事故による被害により家計が急変した場合などに対応するため、授業料免除の特別枠を設定することにしました。現在、1名の学生の授業料を免除しています。

## ◆卒業生の震災被害の状況

本校では、東日本大震災の発生直後から同期生などの卒業生の協力を得て、被害地域の卒業生の安否確認や被害状況の把握に努めてきました。2週間以上全く連絡が取れず避難所でも名前が確認できないなど心配された卒業生もいましたが、幸いなことに亡くなられた卒業生はいない状況です。  
宮城県、福島県、茨城県、千葉県では多くの卒業生が少なからず被害を受けましたが、特に津波で営農基盤が失われた者が3名いました。東京電力福島第

一原子力発電所から20 km以内には7名は、福島県、山形県、千葉県などに避難して、被災者支援関連の仕事にいたりしています。また、南相馬市、伊達市、二本松市などにいる卒業生は、放射線量を気にしながら不安な毎日を送っています。

## ◆専修科（科目履修コース）の案内

専修科は現に農業経営に従事している農業者などのために用意された課程で、科目履修コースは本校の講義を学生と一緒に聴講するコースです。  
本年度2・3学期の授業は、食の安全を脅かす諸要因の科学的な理解、生産者のモラル、消費者への情報発信・交流の手法などについて学ぶ科目や、世界の食料農業政策や農産物輸出戦略などについて学ぶ科目、経営者の社会貢献の考え方や農に関わる思想、哲学などについて学ぶ科目などが開講されます。  
各科目の授業内容や講義日程などの詳細は本校HPをご覧ください。興味のある科目がありましたら是非受講してください。

## ◆恒例の豊饒祭、今年も開催

来る11月27日(日)、つくばでは3回目となる「豊饒祭」(学園祭)が開催されます。今年も、全国の卒業生が提供してくださる農産物の販売を中心に、現在、学生がさまざまなイベントを計画しています。  
特に、昨年好評だったプロのマジシャンによるマジックショーは人気を呼びそうです。  
当日は、たくさんの方のご来場を学生、職員一同お待ちしております。



【編集後記】  
行政刷新会議による事業仕分けを受けて、農林水産省経営局において平成24年度以降の農業者教育についての検討が行われ、現行の農業者大学は残念ながら継続されないこととなりました。  
そこで、今号及び次号で、つくばでの農業者大学の取り組みを紹介していきたいと考えております。その手始めとして、今回、先進経営体等派遣実習を取り上げました。  
連日の真夏日のなか、節電に取り組まれていることと思いますが、無理をしすぎないよう気をつけてお過ごしください。

昨年は1,100人もの方がありました

農業者大学校広報誌

## のうしゃだい 第4号

<発行日>

平成23年9月1日

<編集発行>

独立行政法人 農業・食品産業技術総合研究機構  
農業者大学校 企画管理室 企画チーム

〒305-8523

茨城県つくば市観音台 2-1-12

TEL 029-838-1025

http://farmers-ac.naro.affrc.go.jp/

